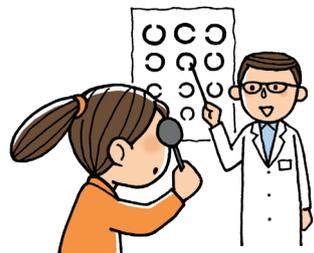


今回の精神神経発達検査では…



私たちは、日常生活の中で視力や運動能力、
“認知機能”の力など、さまざまな力を使っています。

認知機能は、視力や運動能力よりも
はかるのが難しく、専用の検査が必要です。



今回の精神神経発達検査では、認知機能の一部である注意・集中の力と、
指先の器用さを、コンピューターを使った検査ではかります。

日常で使う様々な力、認知機能

認知機能は下の図のようにさまざまな力があります。

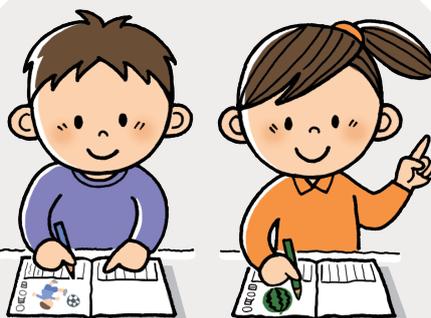
これら是一例ですが、私たちはこれらの力を意識せずに組み合わせて、
日常生活を送っています。



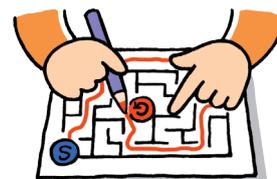
記憶の力：
ものごとを忘れずに覚えて、思い出す力。



計画・遂行の力：
ものごとがうまくいくように計画を
立てる力。立てた計画に沿って
準備し、行動する力。



空間認識の力：
物の大きさや形を捉える力。
奥行きを捉える力。



注意・集中の力：
注目したいものごとに意識を向ける力。
向けた注意を、続ける力。

次のページで認知機能の一つ、注意・集中の力が働いている場面について紹介します。

日常生活で注意や集中の力が働いている場面の例

注意の持続

本を読んでいて、ふと時計をみたとき、「こんなに時間がたっていたの？」ということありませんか。他にも、長い映画をずっと見られるなど、一つの作業を続けられるのは、注意の持続の力が働いているからです。

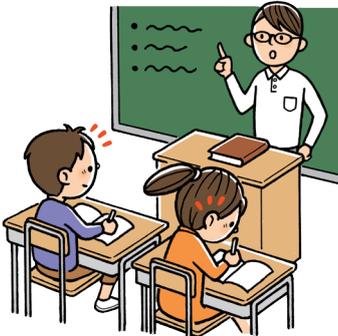


注意の選択

駅のホームで電車が走っている時やうるさい人混みでも、一緒にいる友だちの声は聞き分けられますよね。他の音に惑わされず、友だちの声に注目できているからです。こういう時に、注意の選択の力が働いています。

注意の切り替え

例えば、テレビを見ているときにだれかに声をかけられたら、そちらに注意を向け、用事が済んだらテレビにまた集中することがあると思います。他に、お母さんの様子を見ていると、料理中にインターホンが鳴ったら、料理の手をとめて、宅配便を受け取り、また料理に戻ることができますよね。こんな時、お母さんの声や、インターホンの音で注意を切り替えています。



注意の振り分け

学校で先生の話をお聞きしながら聞いた内容をノートに書いていませんか。こんな時は注意を一つのことに集中せず、耳と目と指に上手に注意を分配して作業を行っています。

【コラム】子どもから大人へ

10歳を過ぎると精神的な自立が始まり、およそ20歳ころまでかかります。外来で、子ども達を見ていると、ちょうど4年生でこの時期を迎えていることがよくわかります。9歳までは「ひとつ、ふたつ、・・・このつ」と呼びますが、10歳では「つ」がつきません。このため落語では10歳を「つばなれ」と呼ぶのですが、昔から「つばなれ」の時期から子ども扱いをしなくなります。この時期から気持ちが親から離れて仲間への志向が高まります。そして「群れる」という行動を好むようになります。「何かをするというのではないけれど、仲間と一緒にいると楽しい」というものです。思春期にはこの群れる経験がとても大切になります。しかし一方では、孤独に耐える強さも身につけていかねばなりません。群れから離れることはさみしいし、不安です。しかし、目指すものを見つけたなら、「私は一人でもよい」と踏ん張ることのできる強さも大切なのです。

小枝達也（国立成育医療研究センターこころの診療部）